慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コメント3
Sub Title	Comments 3
Author	佐藤, 健太郎(Sato, Kentaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・3 (2011. 6) ,p.134(232)- 136(234)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム : 地中海世界の旅人たち : 中世から近世へ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コメント3

佐藤健太郎

関哲行・湯川武両氏の報告へのコメントとして、ジブラルタル海峡の両岸にまたがるマグリブ・アンダルスの歴史を専攻する立場から、キリスト教世界とイスラーム世界の双方を横断する旅をおこなったハジャリーという名のモリスコ（キリスト教への改宗を強いられたスペインの元ムスリムおよびその子孫）の事例を取りあげる。ハジャリーは生涯に三度大きな旅をおこなうが、その旅はいずれも、旅人ハジャリーの内面にも大きな変化を生み出すものであった。ハジャリーは、一五七〇年頃、モリスコが集住する村に生まれた。親の影響で幼い頃からアラビア語とイスラーム信仰にふれていたようだが、もちろん表向きはカトリックとして生活していた。長じて彼はマグリブに移住してサアド朝の翻訳官をつとめ、その晩年に自伝を残している。

彼の第一の旅は、三〇歳の頃、一五九九年にスペインを脱出してマグリブへと移住する旅である。当時、イスラーム勢力との内通を疑われたモリスコは海岸地帯に近づくことを許されておらず、ハジャリーが海を渡るためには生粋のキリスト教徒を装わなければならなかった。彼の言うところに従えば、スペイン語を学んだのもそのためだったという。スペイン語を話し、スペイン人風の服装をしたハジャリーはマグリブとの交易をおこなうスペイン船に乗り組み、さらにその船を抜け出して、見事ムスリムが暮らすマグリブへと移住することに成功する。その際、マグリブの住民からスペイン人のキリスト教徒と間違われる一幕もあるのだが、ともあれ、この旅によって彼はキリスト教圏からイスラーム圏へと渡ることができた。彼がいつ頃から明確にムスリムという意識を抱くようになったかは定かではない。自伝の中では幼い頃から父親を通してイスラームの信仰を抱いていたとはい

うが、一方で彼はグラナダ大司教の知遇も得るなど、キリスト教スペイン社会にそれなりに順応してもいた。したがって、この時のマグリブへの旅は、少なくとも表面上はキリスト教徒であったハジャリーが名実共にムスリムとして生きるようになった出来事であったといえるだろう。

第二の旅は、一六一一年から一四年にかけてサアド朝の翻訳官をつとめていた四〇代半ば頃のことである。この時期は、ちょうどスペインからモリスコが最終的に追放された時期にあたっている。そうして追放されたモリスコの中にマグリブへ渡る船上でフランス人船員に財産を強奪されたと訴える者があり、ハジャリーはその財産返還交渉のためにフランスへ派遣されたのである。この時ハジャリーはフランスだけではなく、スペインからの独立を果たしつつあったネーデルラントにも赴き、第二代総督マウリッツとも会見している。したがって、この旅の背景にはスペインに対抗してネーデルラントとの関係を模索するサアド朝スルターンの意向がはたらいていたと見ることもできる。この旅の中でハジャリーは、オランダ東洋学の先駆者エルペニウスをはじめ、行く先々で出会った人々と宗教論議をかわし自らの内にあるイスラーム信仰を再確認していく。その中で彼が特に感銘を受けた出来事が、「東インド」（おそらく東南アジア島嶼部のことであろう）より届いたというアラビア語の本をエルペニウスら東洋学者から見せられたことだった。この本を目にしたハジャリーは、ヨーロッパのキリスト教徒が様々な言語に分裂している一方で、ムスリムがはるかインド洋の彼方の「東インド」に至るまで皆アラビア語を用いていることに思い至り、あらためてイスラーム信仰の正しさと優位性を認識するのである。この第二の旅は、キリスト教世界をふたたび訪れ、イスラーム世界との比較をすることによって、自己のイスラーム信仰をあらためて確認する旅でもあった。

第三の旅は、晩年、六〇代にはいってからのメッカ巡礼の旅である。一六三四年、サアド朝宮廷での翻訳官の職を辞したハジャリーは、東方へ向かって旅立ち、念願のメッカ巡礼を果たす。言うまでもなくこの旅は、ハジャリーにとってムスリムとしての人生を完結させるためのものであったが、帰途に立ち寄ったカイロでウジュフーリーという名のイスラーム知識人と出会い、自伝執筆を勧められることになる。ウジュフーリーはハジャリーの数奇な人生からキリスト教にかかわる情報を得たいと

いう意図をもっていたようだが、ハジャリーはこの自伝執筆の過程でこれまでの自分の人生が神の恩寵に満ちていたことにあらためて思い至ることになる。モリスコとして異教徒に囲まれた境遇で育ちながらも、イスラーム信仰とアラビア語を身につけ、それを守り通すことができたのは、とりもなおさず神の特別の恩寵があればこそのことだったのだと気づくのである。こうして、人生最後の旅の中でハジャリーは、自分の人生を神の恩寵による様々な奇蹟にいろどられた特別なものだったのだと認識することになったのである。

ハジャリーの例に見られるように、旅とは物理的な現実世界を移動すると同時に、旅人の内面世界においてもある種の移動をともなうものである。ハジャリーは、キリスト教世界とイスラーム世界との間を横断し、またイスラームの聖地へと移動していく過程で、自己のムスリムとしての意識をより高め、内面世界においてもイスラーム的な境地へと旅をしていったといえるのではないだろうか。

コメント4

神崎忠昭

アンリ・ピレンヌ（一八六二―一九三五年）は「イスラームの登場により、それまでの軸であった地中海のコミュニケーションは衰え、軍事的にもアラブ勢力はコンスタンティノープルや西ヨーロッパを圧迫し、さらに教義的にも東方キリスト教世界と西方キリスト教世界の分断を決定づけた。その結果、ローマ教皇がフランク王国のシャルルマーニュに戴冠するに至り、これらの諸要因によって、農村を基盤とする停滞的な中世ヨーロッパが成立した」とする構想を打ち出し、ヨーロッパ中世史研究に画期をもたらした。このピレンヌ学説はさまざまに